仮面舞踏会

桐方　柏江

今日もまた、憂鬱だ。

「きみ、いつも笑っているね。そんなに、毎日が楽しいの？」

何も知らないやつは言う。

「えー？　なんかそれバカにされてるみたーい。」

笑顔を張り付けて答える。

「悩み事、なんて、ないみたい。」

「人並みにはなやんでるよー。」

悩みのない人間なんて、いるわけないだろうが。

「あ、そうそう。昨日のドラマ、見た？　あの主人公が、すっごい好きでね、それで……」

「ごめんねー。まだ見てないんだー。録画はしてあるから、見たら感想おしえるねー。」

「あ、まだ見て、なかったんだね。ネタバレ、しそうになって、ごめんね。」

「大丈夫ー。ほら授業始まるよー。」

やっと解放された。こんな日常の繰り返し。面白くもないのに笑い、わからないものに共感する。誰も嘘には気がつかない。まあ、気づいてほしいわけではないんだけど。

「それじゃ、また、明日ね。」

「また明日ー。」

今日も嘘をつきとおした。そんなの面倒だって？　いやいや、一人で浮いてるほうが厄介だよ。遠足のグループも、授業のペアワークも、一人だけじゃ何にもできない。一人で浮いてると、いじめの標的にされるかもしれない。

だったら、面倒でも誰かといたほうが便利だと思わない？　クラス、部活、帰り道。いろんな場面で仮面を使い分ける。のけ者にされないように。好かれなくてもいいから、嫌われないように。

寂しくないかって？　一人が好きだから、何とも思わないね。むしろ、なんであんなに群れたがるのか、わからないよ。一人のほうが自由だし、気楽だろう？　それに、家には唯一の理解者がいるからね。

「ただいまー。」

静かな家に声が吸い込まれた。机の上には五百円。階段を上がって自分の部屋へ向かう。扉を開けると待っていたのは、薄汚れた、見慣れた光景。鞄を落として、ベッドに勢いよく寝転ぶ。

「ただいま。」

もうボロボロになった人形に話しかける。

「今日も頑張ったよ。興味もない話も聞いたし、ちゃんと笑ったよ。」

にっこりと人形が笑いかける。

「明日もちゃんと、笑わないとね。」

ふと、思う。「私」はだれだろう。心と裏腹に笑っている「私」は「私」なんだろうか。そんなことを思いながら、意識が落ちそうになる。それを何とか耐えて、シャワーだけ浴びて、今日は寝た。いつもより早い就寝だった。あの人たちの帰りが、いつもより早かったから。

五百円玉は、いつもの喧嘩に巻き込まれ、無残に転がり、踏みつけられた。

学校に行く前にいつものように鏡に向かう。人形の笑顔を手本に、自分の口角を、ぐいっと上げる。よし、準備オッケー。今日も一日笑っていられる。

「おはよー」
教室に入りながら、名前も覚えていない誰かに声をかける。
「おはよう。」
誰かから挨拶が返ってくる。今日も上々。誰も無視したりしない。
また、あいつが来た。結局、昨日ドラマ見るの忘れちゃったな。なんて言おうか。適当にごまかしても、きっと気づかれない。
「おはよう、ドラマ、見た？」
「まだ見れてないんだー。ごめんねー。」
「そっか、感想、まってるね。」
「うん、ありがとうー。」
何とかなった。そのあとも他愛もない話が続けられていくのを、笑顔で聞きながら、めんどくさく思っていた。
笑っている自分と達観している自分。ふと、昨日の夜、考えたことを思い出す。「私」は誰だろう。笑っている自分が「私」なのだろうか。いや、違う。これは、自分で生きやすいようにと、繕ってる仮面だ。じゃあ、人形の前での自分が「私」なのだろうか。誰もその「私」を知らないのに、それが本物の「私」だと言っていいのだろうか。それも違う気がしてしまう。どれが「私」だろう。
笑顔の「私」？　達観してる「私」？　人形の前の「私」？
家で沈黙を守る「私」？
「私」はどこにいるの？
分からないわからないワカラナイ。
「ねえ、大丈夫？」
声が聞こえて、我に返る。だめだ。今は笑わないと。
「大丈夫だよー。何にもないから。」
「……そっか。何かあったなら話してね。」
「うん。ありがとうー。」
そう言って、戻っていく背中を見ながら、ひとり呟く。
「どうせ言ったって、君にはわからない。」
家に帰って、笑顔を捨てて、人形と向き合う。
「ねえ、『私』はだれー？」
……あれ？　違う。仮面を外そうと思ったのに。人形の前では私に戻れると思ったのに。ここだけは「私」でいられる場所だと思ったのに。
鏡の前で笑顔を張り付けた自分を見る。そこには、引きつった表情の「ナニカ」がいた。
「『私』はなんなのー？」
人形に問う。答えは返ってこない。
「教えてよー。あなたにしか頼れないんだからー。」
答えは返ってこない。
「教えてよ！」
投げた人形が鏡にぶつかり、足元に転がる。落ちた人形を見て虚しくなった。なにをしてるんだろう。人形が、喋るはずもないのに。
「もう、明日に備えて寝ようかなー。」
「ナニカ」が気持ちの悪い笑みを浮かべて言う。いつものように、人形を抱きしめながら寝ようとするが、何かが違う気がして、今日は一人で布団にもぐった。いつもより、広いベッドで、とても寒い気がした。
朝になっても「ナニカ」は笑っていた。笑いたくもないのに笑っているせいで、疲れ切った笑いだった。なんとか自然な笑い方をしようと、口角や目じりを触ってみるが、もっと滑稽になっただけだった。
「おはよー。」
学校を休むとクラスの話題に置いて行かれてしまう。嫌がる心にリードをつなぎ、頭で引っ張る。何とか今日を乗り切れば、明日は休みだ。気づかれないように、あと数時間だけ頑張ろう。
「おはよう。何か、嫌なことでも、あったの？」
気づかれてしまった。なんで、話しかけてほしくないのに、話しかけてくるんだろう。笑わなくちゃ。せめて、小さな悩み事に見えるように。
「そんなことないよー。心配しないでー。」
「すごくつらそうな顔してるよ。本当に大丈夫？」
「大丈夫だよ。ほら、笑えてるでしょ？」
精一杯の笑顔を相手に見せる。誰かを心配しているかのような顔で見られていることに驚いた。
「無理しないでね。」
その一言だけを置いて、席に戻っていった。いつも始業の鐘がなるまで、ここから離れてくれないのに。
その後も、何人にも声をかけられた。ごまかしていく度に、虚しくなっていくのを感じた。日々を生きやすくするために仮面を被っているのに、どんどん生きづらくなっていく。私に、誰も、構わないで。
何とか一日が終わって、帰ってきたときには笑っているのか、泣いているのか、怒っているのか、わからない顔をしていた。落としたままだった人形を拾い、ベッドに寝転がる。
人形の顔を見ていると、今日クラスで見た、心配そうな顔を思い出した。クラスでしか繋がっていないのに、どうしてあんな顔をしたんだろう。「私」を知らないくせ

に。

思って、気づく。「私」は自分以外の誰かに「私」を知ってもらいたかったのかもしれない。自分で仮面の下に隠した「私」を。本当は友達が欲しい「私」を。臆病な私を。

その時、涙と同時に、仮面が外れた。こびりついていたのが信じられないくらいに、あっさりと。呪いが解けた顔はとてもすっきりとしていた。

「よかった。」

自然に声が滑り出た。ああ、これが、私か。自分でも久しぶりに会ったような気がする。

久しぶりに出てくる私は、外の明るさに驚いた。私が目をそらしていた世界は、悪いものがあふれるだけのものではなかった。

きっとみんな、同じように仮面を被っているのだろう。隣の家のおばさんも、駅へ急ぐサラリーマンも、クラスで話しかけてくるあの子も。本当の自分を隠して、仮面の相手と踊っている。いつかお互いの仮面が外れることを、無意識に願いながら。

隠す理由なんて人それぞれだろう。でも、そうやって、苦しみながらも、人と関わっていくんだろう。あの子が仮面をつけてまで、私と関わってくれたように。

私も少し、変わってみようか。今まで、向き合って来なかった分、私から話しかけてみよう。何の話題にしようかな。ああ、録っていたドラマの感想を伝えよう。彼女は誰が好きなんだっけ。

「ありがとう。」

人形につぶやく。その笑顔は、いつもより、深いものである気がした。きっと気のせいだろうけど。

窓の外を見て思う。ああ、今日は爽快な日だ。